

電子カルテ環境下での輸血システムの運用

沢水 隆子,比良野 正孝(市立堺病院 臨床検査技術科)

【はじめに】当院では平成 15年 4月、電子カルテシステムが導入された。次いで平成 16年 5月には、電子カルテの本稼働（カルテ記載開始）にさきがけ輸血管理システムと輸血オーダーシステムとの連携により、製剤管理及び患者照合などを統合化したシステムによる運用を開始した。

その概要及び使用経験について報告する。

【システム概要】ハードウエアはファイル用サーバ1台、クライアントPC3台、ソフトウエアは、電子カルテシステム（富士通 EGMAIN-EX）、検査システム（富士通 LABOTT- ）、輸血管理システム（オーソ社・BTDX）、輸血照合システム（オーソ社・BTDQuery）

【運用と効果】輸血部門システムとしてオーソ 社 B T D X を導入し、輸血管理システム・全自動輸血検査装置 Aut ovue・検体検査システム（富士通 LABOTT- ）を接続し電子カルテと送受信を行っている。オーダー画面では臨床側の指示ができる限り詳細に伝わるようにカスタマイズし、1日のスケジュール表より確認できるようにした。患者情報は患者単位ごとにファイル化し、輸血関連情報が管理可

能になった。またオーダーリングシステムにより迅速なオーダー受信ができ、製剤オーダー時の血液型の転記ミスを省略できた。患者照合システムは院内 LAN上のイントラネットを介して、ベッドサイドで患者リストバンド（外来の場合は診察券）と血液製剤のバーコードを読むことにより、患者適合製剤の照合と輸血実施入力を行っている。また出庫時にも読み合わせと照合を実施している。従来の伝票運用に比べ大幅に人的なリスクの軽減が可能となり、輸血業務全体の安全性が向上した。また迅速な対応が可能となり煩雑なペーパー管理も省略できた。

【考察】安全で迅速な運用が求められる輸血業務において本輸血システムは、十分要望にこたえられるものである。電子カルテ及び検体検査システムは24時間対応であるが時間外の輸血業務は伝票で行っている。今後は時間外の運用を視野に入れていきたいと思っている。

連絡先：072-221-1700(2275)